

第13章 景 観

第 13 章 景 観

13-1 概 要

破碎棟の存在が地域景観に与える影響について検討を行った。

13-2 調 査

現地調査により、現況の把握を行った。

(1) 調査事項

- ・ 地域景観の特性
- ・ 眺望点からの景観
- ・ 既存施設の圧迫感の状況

(2) 調査方法

ア 地域景観の特性

現地踏査により行った。

イ 眺望点からの景観

不特定多数の人が眺望できる場所を選定し、そこから事業予定地の方向を眺望した景観写真を撮影した。

ウ 既存施設の圧迫感の状況

事業予定地内の還元施設（グランドゴルフ場）において、天空写真を撮影した。また、圧迫感の指標の一つである形態率を求めるために、この地点における形態率図を作成した。（形態率の概要は、資料 14-1（資料編 p. 429）参照）

なお、形態率を求める高さは、地上 1.5m とした。

(3) 調査場所

ア 地域景観の特性

事業予定地及びその周辺

イ 眺望点からの景観

図 2-13-1 に示す 3 地点とした。

ウ 既存施設の圧迫感の状況

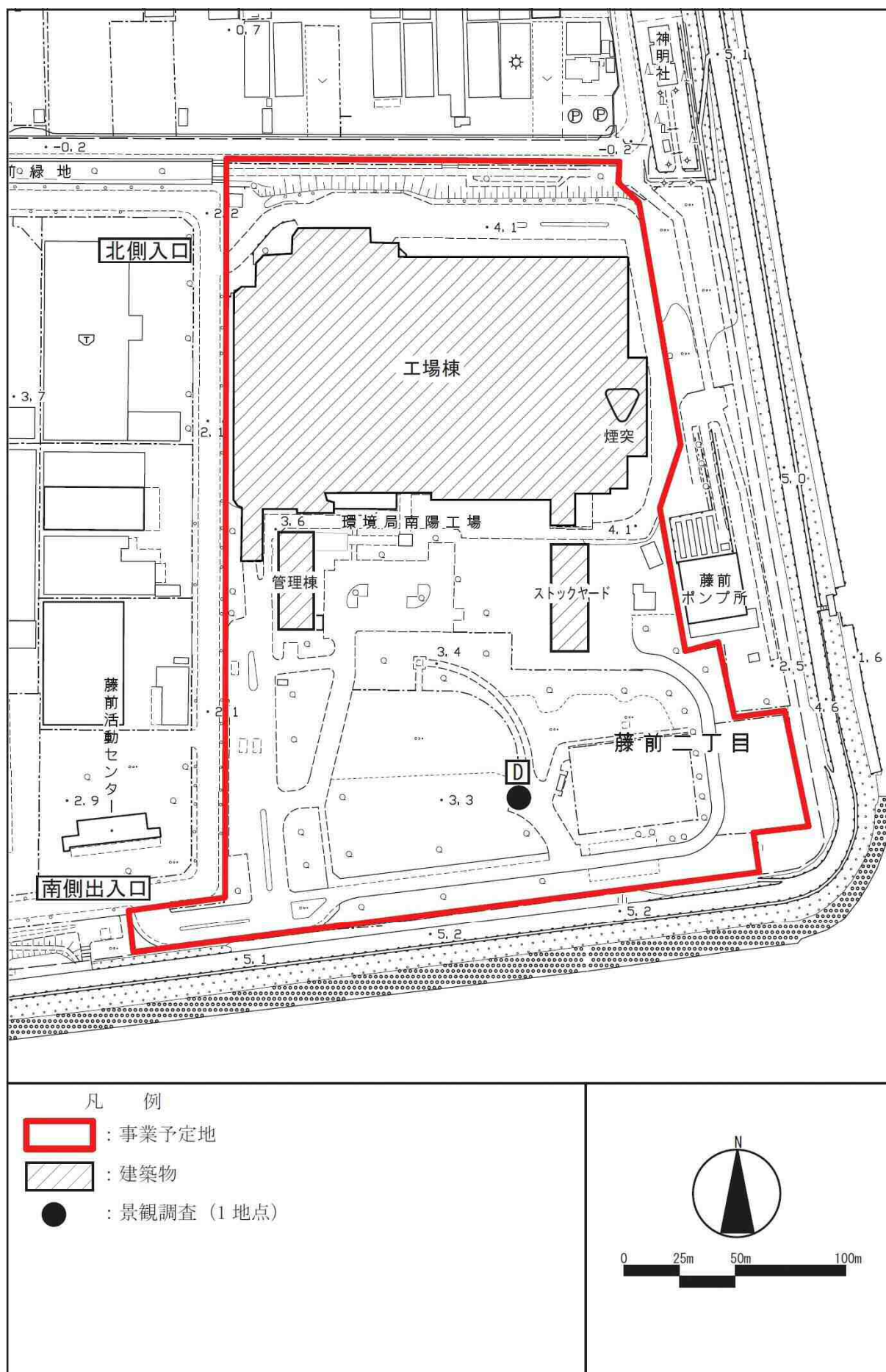
図 2-13-2 に示す 1 地点とした。

(4) 調査時期

現地踏査、景観写真及び天空写真の撮影は、平成 31 年 1 月 9 日（水）及び平成 31 年 1 月 11 日（金）に実施した。



図 2-13-1 景観調査地点 (眺望点からの景観)



(5) 調査結果

ア 地域景観の特性

事業予定地は、名古屋市の南西部に位置し、近傍には流通関係の事業所等が多く、その周辺には水田等の農地が広がり、住宅が点在している。また、事業予定地東側には新川が流れ、南側は名古屋港に面している。

事業予定地及びその周辺の状況を、写真 2-13-1 に示す。



(撮影日：平成 31 年 1 月／名古屋市環境局)

写真 2-13-1 事業予定地及びその周辺の状況

イ 眺望点からの景観

眺望点からの景観の状況は、後述する予測結果の現況の写真（写真 2-13-2～4（p. 373～375 参照））に示すとおりである。

ウ 既存施設の圧迫感の状況

天空写真の撮影結果は、後述する予測結果の現況の写真（写真 2-13-5（p. 376 参照））、事業予定地及びその周辺における建物の形態率は、後述する表 2-13-1（p. 372 参照）に示すとおりである。

13-3 予 測

(1) 予測事項

新たに建設する破碎棟による景観の変化及び圧迫感の程度とし、具体的には、以下に示す項目について検討を行った。

- ・眺望点から事業予定地を眺望した景観
- ・圧迫感の程度

(2) 予測対象時期

破碎棟の存在時

(3) 予測場所

ア 眺望点から事業予定地を眺望した景観

現地調査を行った3地点とした。

イ 圧迫感の程度

現地調査を行った1地点とした。

(4) 予測方法

ア 予測手法

(7) 眺望点から事業予定地を眺望した景観

眺望点における現況の写真に、破碎棟の完成イメージ図を描画したフォトモンタージュを作成して予測を行った。

(1) 圧迫感の程度

現況の天空写真に、破碎棟の形状を描画することにより、存在時における形態率を算定し、変化の程度を予測した。

イ 予測条件

景観に大きな変化がないよう、破碎棟の外壁は、既存施設と同様に明るい色調とした。また、本事業では、既存施設の建屋を再利用する計画であることから、既存施設の外壁の色調は現況と同じとした。

破碎棟の配置、規模、形状及び色彩など、設備更新後のイメージ図は、図1-2-6（第1部第2章2-4「対象事業の内容」(p.12)参照)に示したとおりである。

また、破碎棟の高さを20mとした。

(5) 予測結果

ア 眺望点から事業予定地を眺望した景観

各眺望点におけるフォトモンタージュを、写真 2-13-2～4 に示す。これによると、景観の変化は次のとおり予測される。

(7) 地点 A（藤前活動センター・事業予定地西約 190m：写真 2-13-2）

緑地越しに既存施設及び破碎棟が視認される。

現況では、既存施設が主な景観の構成要素となっている。供用時には西側敷地境界に沿って植栽を増やす計画であり、破碎棟の色彩等に配慮することにより、圧迫感は軽減されると予測する。

(イ) 地点 B（稲永公園・事業予定地南東約 1,810m：写真 2-13-3）

正面に既存施設及び破碎棟が視認される。

現況では、新川及び庄内川の河口が主な景観の構成要素となっている。供用時には、破碎棟が加わり、景観の変化が生じるが、既存施設及び破碎棟が景観の構成要素として占める割合は小さく、景観の変化は小さいと予測する。

(ウ) 地点 C（宝神中央公園・事業予定地東北東約 1,150m：写真 2-13-4）

正面に既存施設と破碎棟が視認される。

現況では、新川及び庄内川が主な景観の構成要素となっている。供用時には、破碎棟が加わり、景観の変化が生じるが、既存施設及び破碎棟が景観の構成要素として占める割合は小さく、景観の変化は小さいと予測する。

イ 圧迫感の程度

地点 D（還元施設・事業予定地内）における形態率の変化を表 2-13-1 に、天空写真を写真 2-13-5 に示す。破碎棟の存在範囲は、既存施設の存在範囲に収まっていることから、形態率に変化は無く、破碎棟の存在時における計画施設の建築物に係る形態率は、現況と同じ 4.8%と予測される。

表 2-13-1 形態率の変化

調査地点	現 況 (%) ①	供用時 (%) ②	変化量 (ポイント) ②－①
地点D (還元施設・事業予定地内)	4.8	4.8	0.0

【現 況】



【供用時】



写真 2-13-2 景観写真（地点 A（藤前活動センター））

【現 況】



【供用時】



写真 2-13-3 景観写真（地点 B（稲永公園））

【現 況】



【供用時】

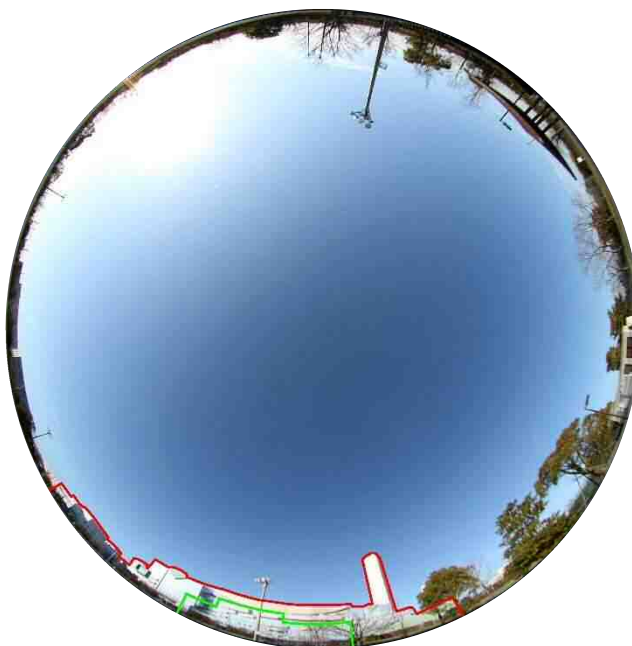


写真 2-13-4 景観写真（地点 C（宝神中央公園））

【現 況】



【供用時】



- 注) 1:赤線は南陽工場の工場棟、管理棟及びストックヤードを示す。
2:黄緑線は建設予定の破碎棟の存在範囲を示す。

写真 2-13-5 天空写真（地点 D（還元施設・事業予定地内））

13-4 環境保全措置

(1) 予測の前提とした措置

- ・破碎棟は、圧迫感を低減するため、できる限り小さくするよう努める。

(2) その他の措置

- ・破碎棟の配置、規模、形状及び色彩についてさらに検討し、周辺環境との調和を図るよう努める。

13-5 評 価

予測結果によると、破碎棟の存在により眺望点から事業予定地を眺望した景観に変化は生じるが、圧迫感の程度について形態率の増加は見られなかった。

本事業の実施にあたっては、破碎棟の配置、規模、形状及び色彩についてさらに検討し、周辺環境との調和を図るよう努める等の環境保全措置を講ずることにより、周辺環境との調和や圧迫感の低減に努める。